尚阿上人繪詞傳

上

向阿上人繪詞傳序

上人行狀載籍極博而至其始末則及史閥文識者憾焉池上西光蘭若上人終焉之地而深藏斯傳啓籥見之識者所憾瞭然始

内閣文庫

明所謂千載闇室日至而頓有餘光者非邪假令其文不詳撰者畫則古禍書則雲竹鑑識所許誰云不然矣伏惟上人面受二尊指揮撰三部鈔也與彼證定疏異域同轍矣導師彌陁化身也上人何等權迹哉諸傳謂上人者藝州之男武田信宗也者疑矣何則剃度入寂春秋大異也斯傳闕疑慎言其餘循循

乎盤焉可謂良史矣夫覺
王之設教也大藏八萬而
後漢土飜經最于楞嚴
國朝譯教魁于三部楞嚴
者房融所筆三部者上人
所述或評以鬼神焉或贊
以佛說焉古人云文者貫
道之器也不深於斯道有
至焉者不也良有以哉今
閱斯傳簡而要婉而順能
得三部體事周一代自非
鉅才碩筆實上人之亞爾

去其世未遠者。爲能至於斯也。是故後世英俊之士。左提右揭。或取之後素。或取之管城。而潤色其鴻業。又可以爲三絶矣。然猶不敢公傳之通邑大都。而藏之名山。待後識者。深矣哉。

松溪義柳和尚者。高仰上人風。獅吼大振。三部指掌。四衆提耳。日課誓受之弟子。六萬餘人。其上足某者。現住西光蘭若。於是師資

相遇。啓其金縢。遂授剞劂氏。於戲。天將假手彼師資。以補上人闕畧。備遐代弘通哉。何其湮古見今耶。頃間和尚來請序於余。余苟住淨華巨刹。則亦無所辭矣。矧予上人挑五代燈。藏往生至要訣於我山。余雖不肖。既業相承其訣。則亦豈可默而止耶。因題數言。冠其篇首。

天明七年丁未夏五月

清淨華院賜紫沙門
仰譽聖道拜首撰

向阿上人繪詞傳刊行乃緣起

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃利益をいたすとて滅ほの今に
至るまで甚化益尤盛んなる彼
述懐を聞に無尽の利益を
いとゝ幼年より
家伝密蓮の流を引とて性
癖純なれハ安心の専に初心絶

彼秘物を藩侯に奉獻乃道俗之勅諚
すること三千余年なり
其の後眞如堂諸衆に請ぜられて彼
霊像前に帰命本願秘を傳授する
こと會又出人乃遺跡池上西光院
に安置するもの住持なること世代
絶ず

絶ず不思議の縁なり其の後
藩侯諸寺に諸日課稱名を拡ること
人々家に有毎日唱ること絶ず
あるべし予は此縁を以て
いひ初めとのひ奉ること
いひ他とのひ過ぎ大利を好ること

一生を俗人に見せ給ふ人なり。有縁あるまゝ。彼
加被力をなしたまひ。実に一世
の間深異ひまなく。抜きたる人なり。
されば上人外事を
たつぬ。諸書に敬重せられ
給ふ上人の如来宛ひ給
ふ。これ上人の生涯を
略して当世伝ふる
家筆にあらざる歟。
されば西光庵の什宝の中
に。何人の撰述とも
知られぬ絵詞伝あり。
知られぬ絵巻に抜異古簡和尚書

抽観雲竹法師の事跡あらく循脚し
特宗し廣澤の末葉大僧正渡文を
附嘱せ給ふ事ハ世人我慢せるを
あはれとて情ハ比丘ハ法師ハ
なを事に出傳を博く尋ね
世を飛ぶし深恩の義を報ぜんとの
[illegible]

梓ゝのわし西光庵に蔵ぬ
乃筆に寄て此傳を撰く粗上人の
行を知り因人重法を尋ひて彼
盛得の三部の秘抄乃ひ当時ゝつる
ゝる法語をとる信しつゝ切に慈悲を
性生の要路ゝ分ゝ上人の

[illegible]
流[illegible]
かいつきぬるなり。宝賢[illegible]
天明七[illegible]

小松渓乃僧義[illegible]記

向阿上人傳卷上

[illegible]本願念佛乃心行い京世叡[illegible]
同[illegible]たり鬼白史賤[illegible]
この[illegible]光明大師震旦[illegible]
て本願[illegible]
いて念佛をひろめ給ひ[illegible]

願成就あるべき名誉となるべきの四遠
に聞こえ稱をいたし深く信を称する人
一天に充満して世間に
人をもつてのごとく光明乃餘輝をつく
らせ給ふ水の清流をくまなく
こそ向ひのと人深き一流乃家迄

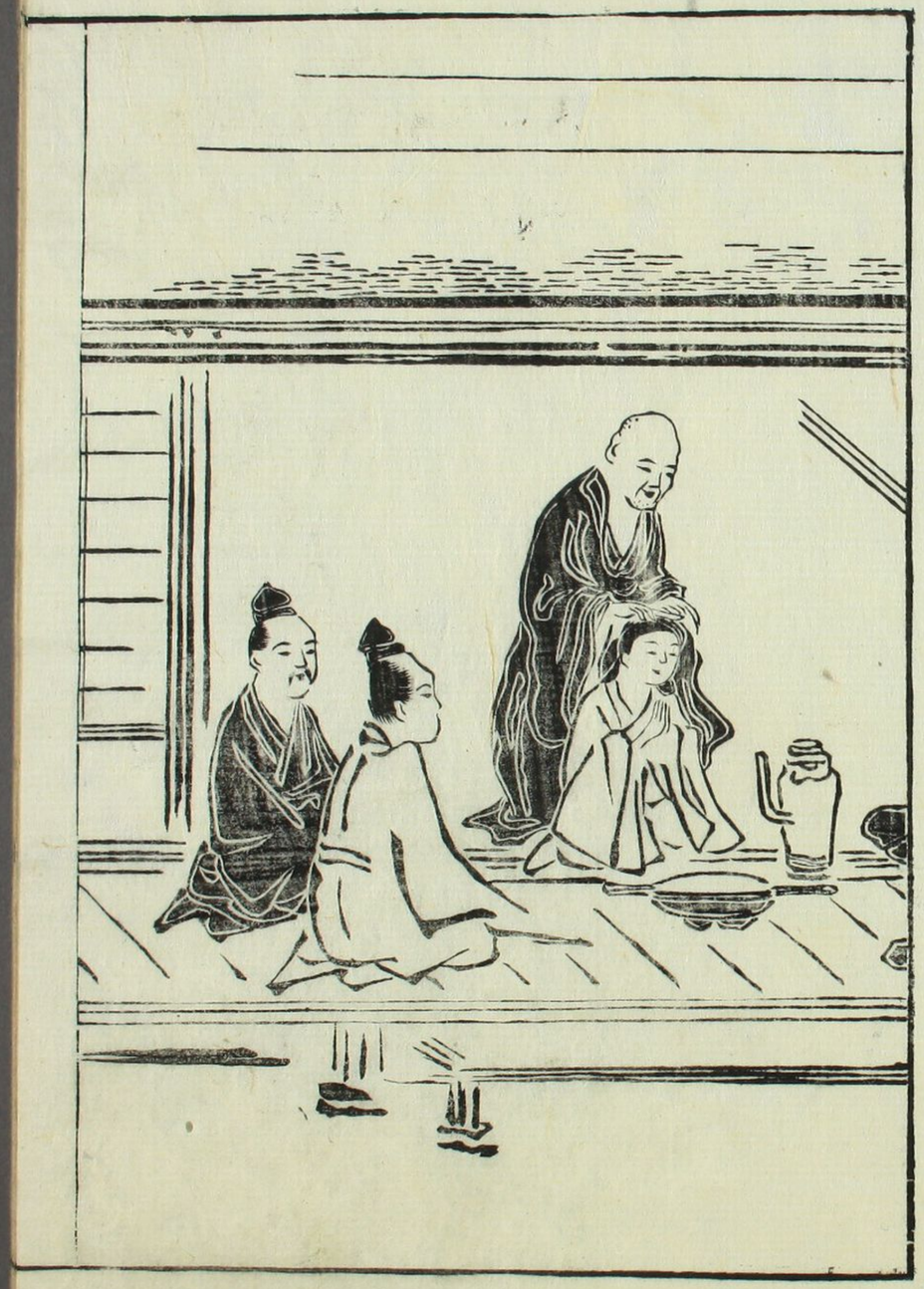
とうて正法の燈をかゝげ邪教の闇を
てらし法の水真をたゝへ海内に流布
まつて念佛の弘通ひろまり西方の
まつ東代の偏邪をうちくだき三部の
西教をあらためて仏者の亀鑑
擬し給へるこそ法華の功勲なり

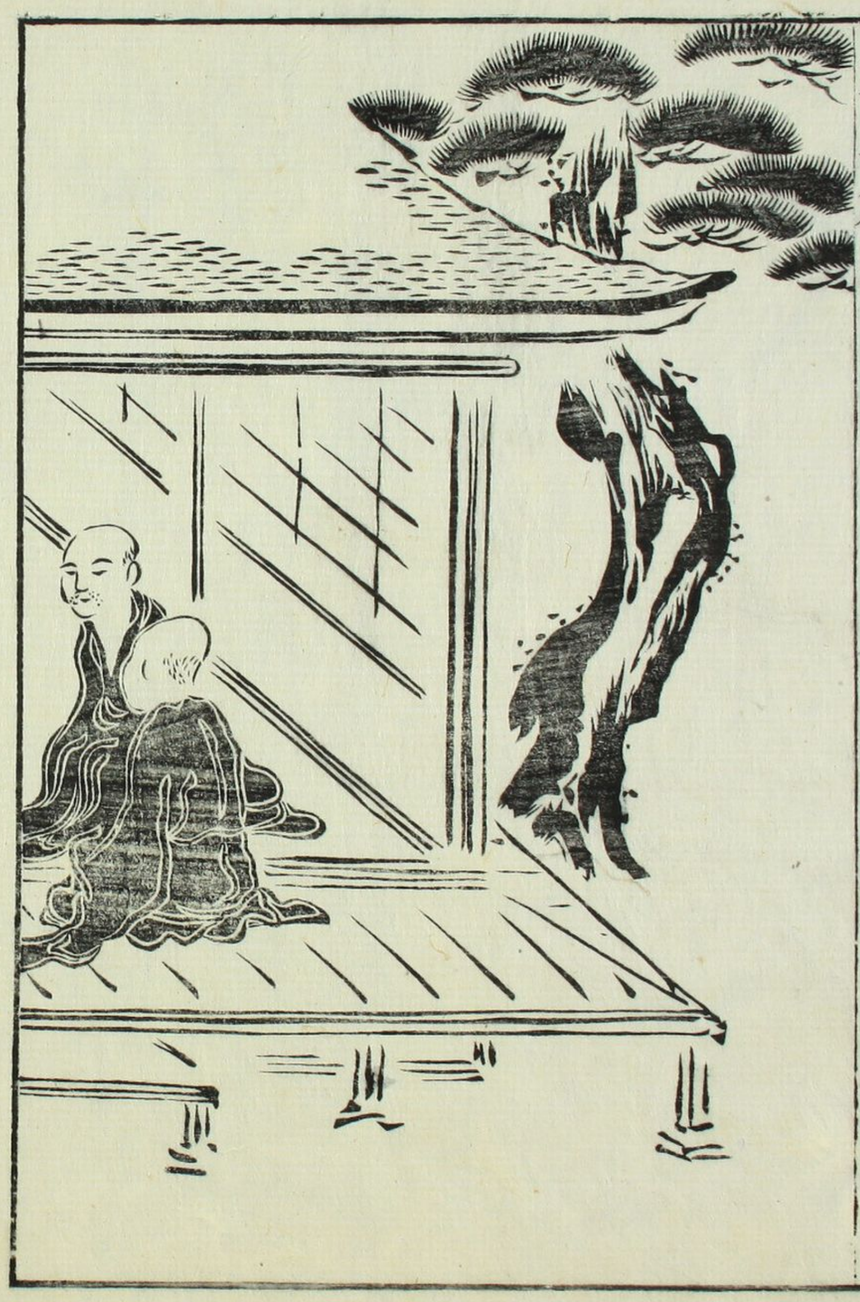
まことにあさきすゑたちなんや
法花を毎日ごとに寶德の光を
ひかせ給ふ事は化乃跡
さてのゆかりをたゝんへ
ゝるたちを後世乃人々にとゝめ
をゝる道きやうにふりて粗その

回記をたゝゝ所蘭より法こうのあと
道場乃ことゝを録とゝゝめ
をゝゝのゝるゝの法ゝ屋とゝゝん
を其信をすめんゝ法花を和ゝを
をゝて法花をゝる繪圖ゝあゝゝて
こゝをを始て實行乃ゝゝれのこゝ

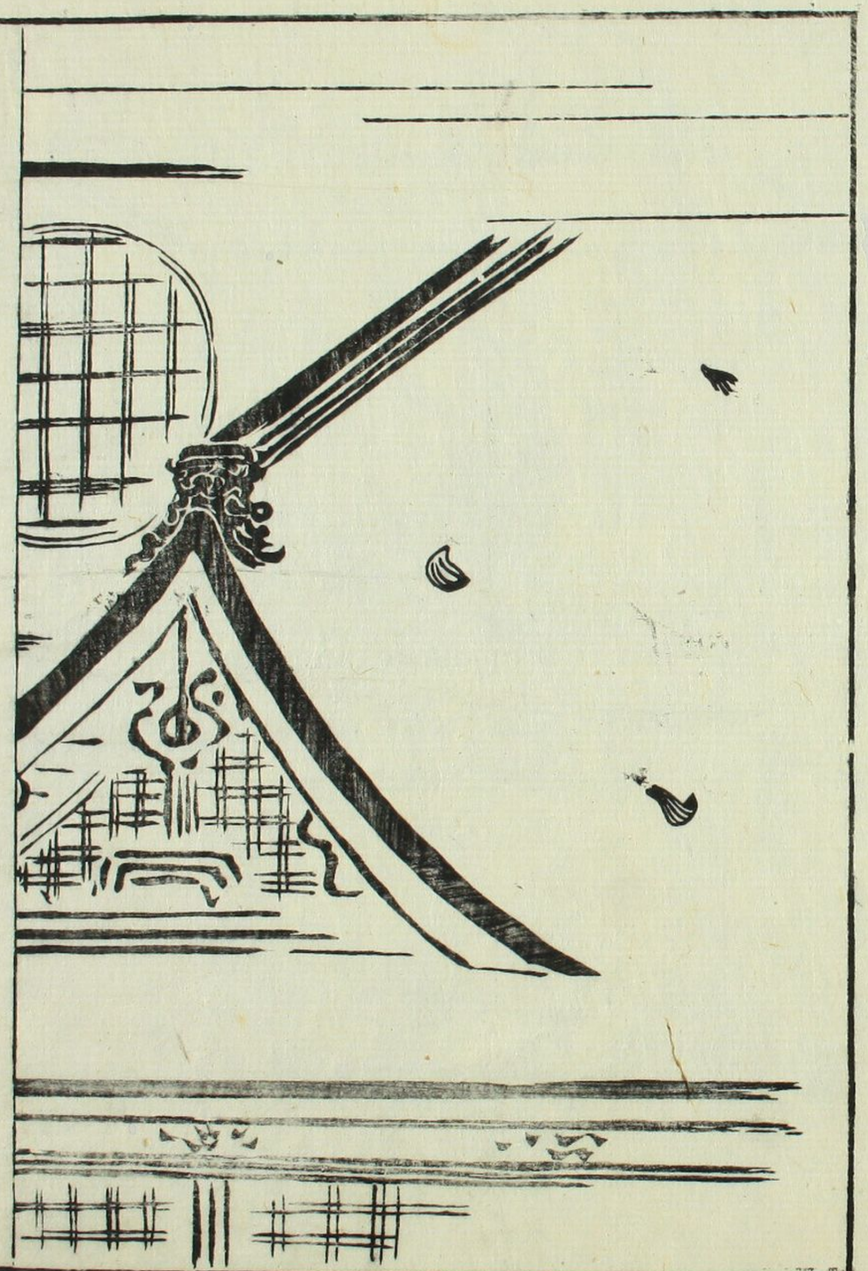
こゝろさしたるとよそ
うをくとし人諱い證賢字ハ向阿
その氏族ハ詳ならず亀山院の
弘安二年ゆ誕生し給ふ
宿善やをりゆ幼稚ゆして
慧敏の資質をうけ

法衣を着して天台の殿門ゆ入
大乘戒をうけ法ゆ者り

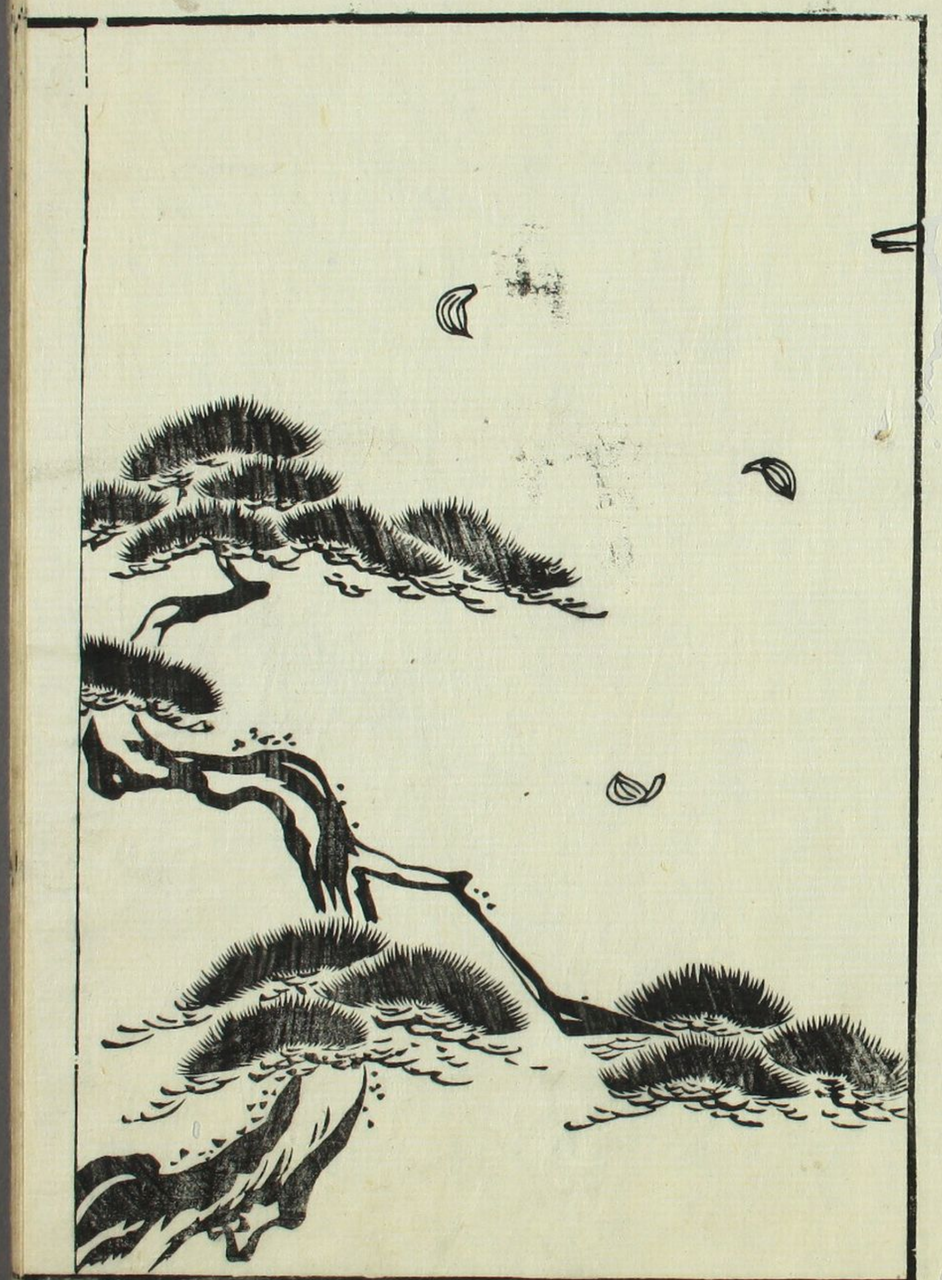


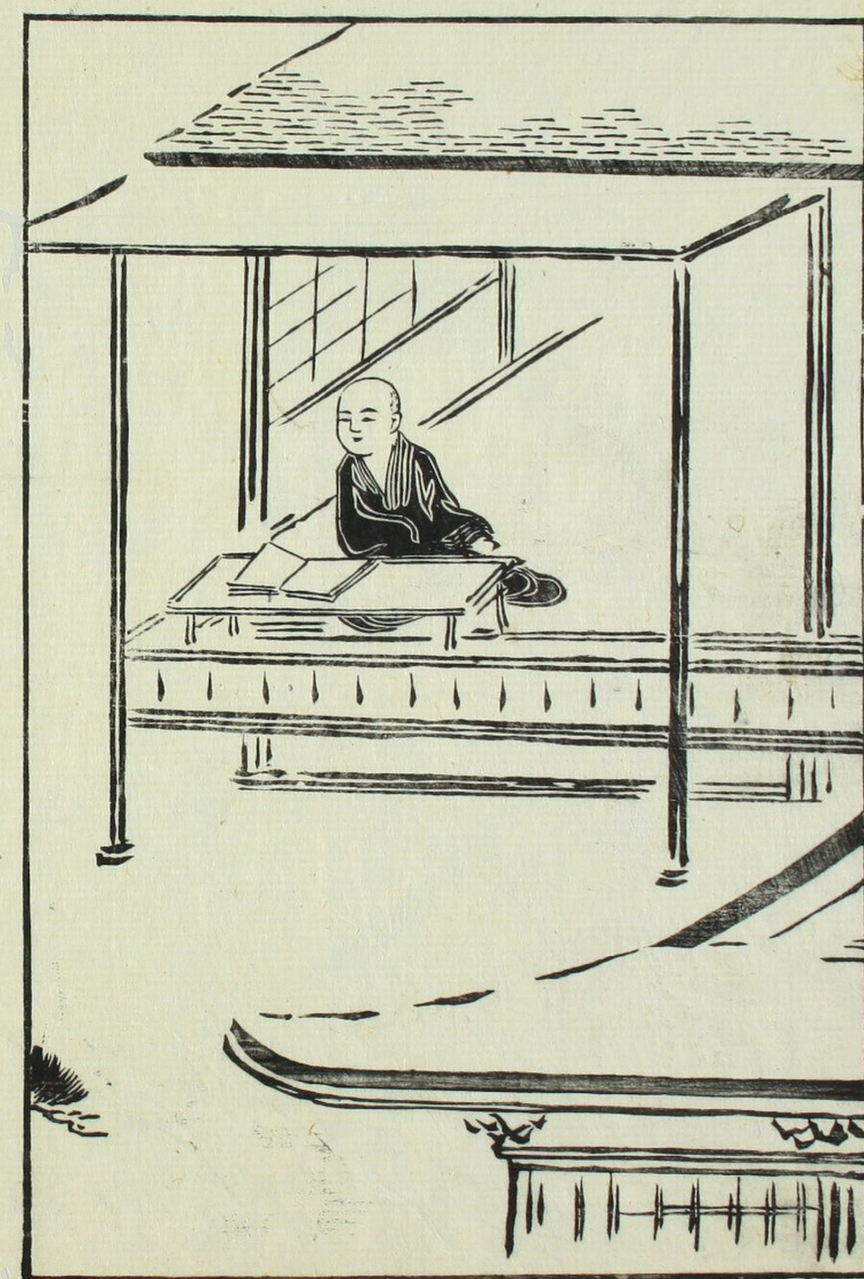


既に出家して幸に高きを捨てゝ
佛法を求めんとて関東に下り
台教を学し給ふに其性聰
敏にして出群の才あり高貴の
家の裏にて四教五時の慶を鏡に掛け
修練の功を上ては一心三観の境智



[illegible]餘力[illegible]筆[illegible]
和尊[illegible]道[illegible]
[illegible]幽玄[illegible]
衆徒[illegible]推[illegible]
[illegible]頂[illegible]





法華ハ寺門乃棟梁ト為リ衆徒の
領袖たるべきといいてもなほりこの世俗
をもすてゝ法華経をこそ修すべ
しとひろめに浄土の教文をこそ
ひきすてゝ西方の資糧をもとゝのへ
給ふ遂ニ弘安十年高らかに二十五箇

秋入相の鐘にうちちらされくいつ
ゐなくさとりひいて西に坂を
のぼり都にとゝ越給ふ如意寺の
あるじを尋て歸京し給ふ
始きてゆくあれをやちらす花
いとゞしくちらせて大門の

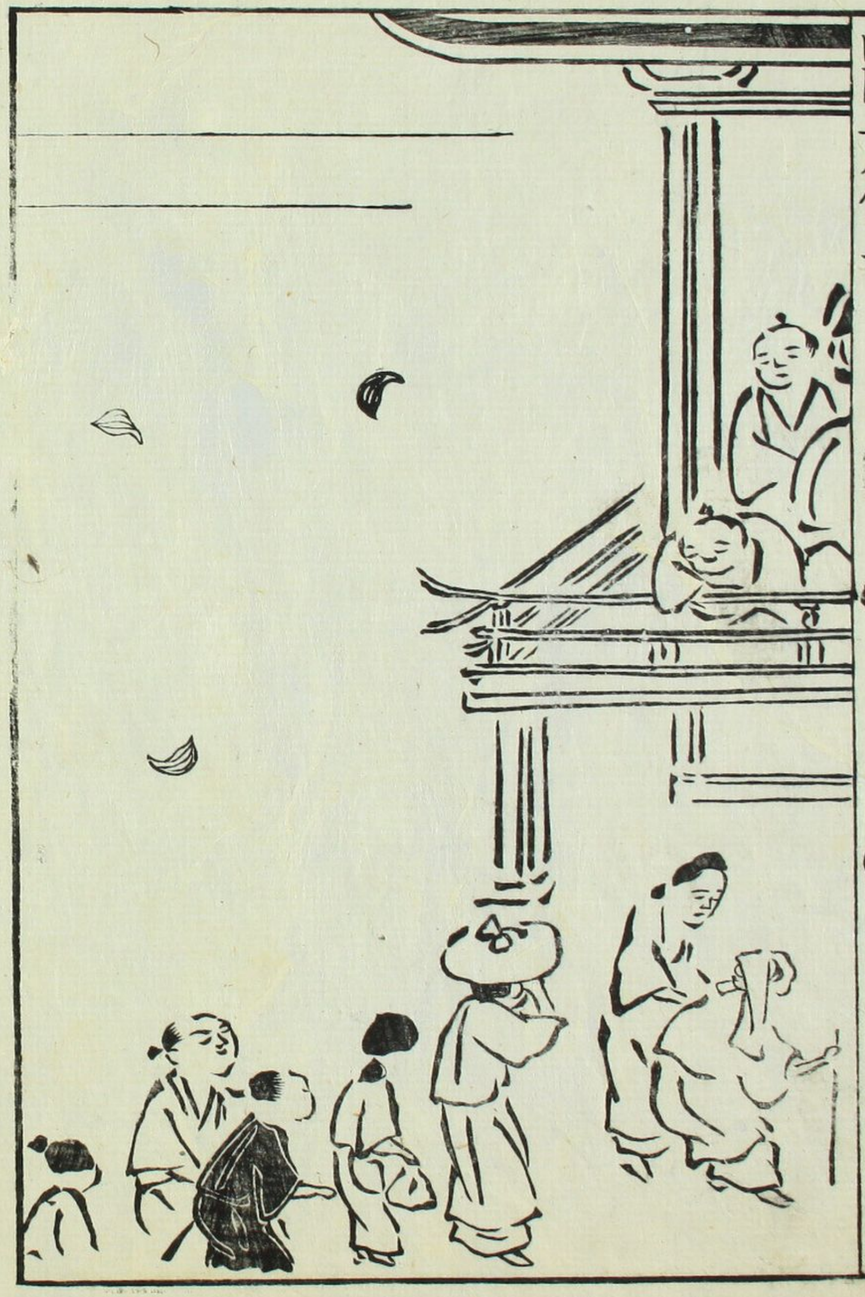
柱に
松にとゝまれ秋をいとはくゝ毎
こゝろゝのこす墨染の袖
此一首の歌書とゝめて西に向て法灯
よりて花開院にゆきて文象に
花服を授け給ふ源通の墨衣

とたちまちに是心と改名し

ちゝ高紀伊国提乃直海よ
りもしき九重の外北白川のほとり
ふ寂寞乃柴乃庵をゝ結法蓮
上人のすまひをもとしてひろ
く念佛を弘ひろめ給ひ

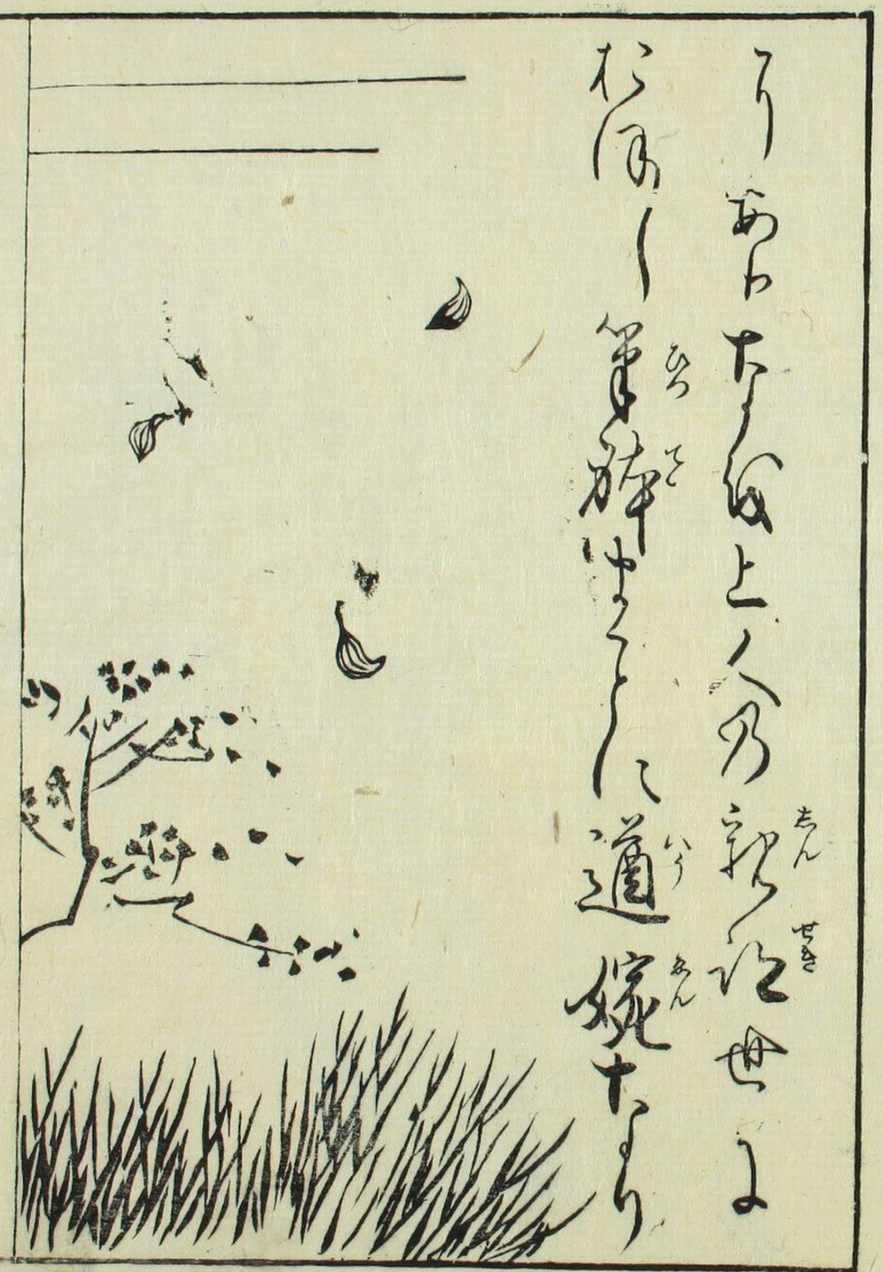
其後吉水乃法流を汲ひて
禮阿和尚乃渇しぼるく宗脉を
うけく向阿上人と号し清淨花院に
住して其義をひろめ玄奥
聖阿圓家なりをいふ上人みな
門下にあつまへて洛中乃貴賤

あはきこゝろをすゝめて化導(けだう)ひろく
ちうんなりきり

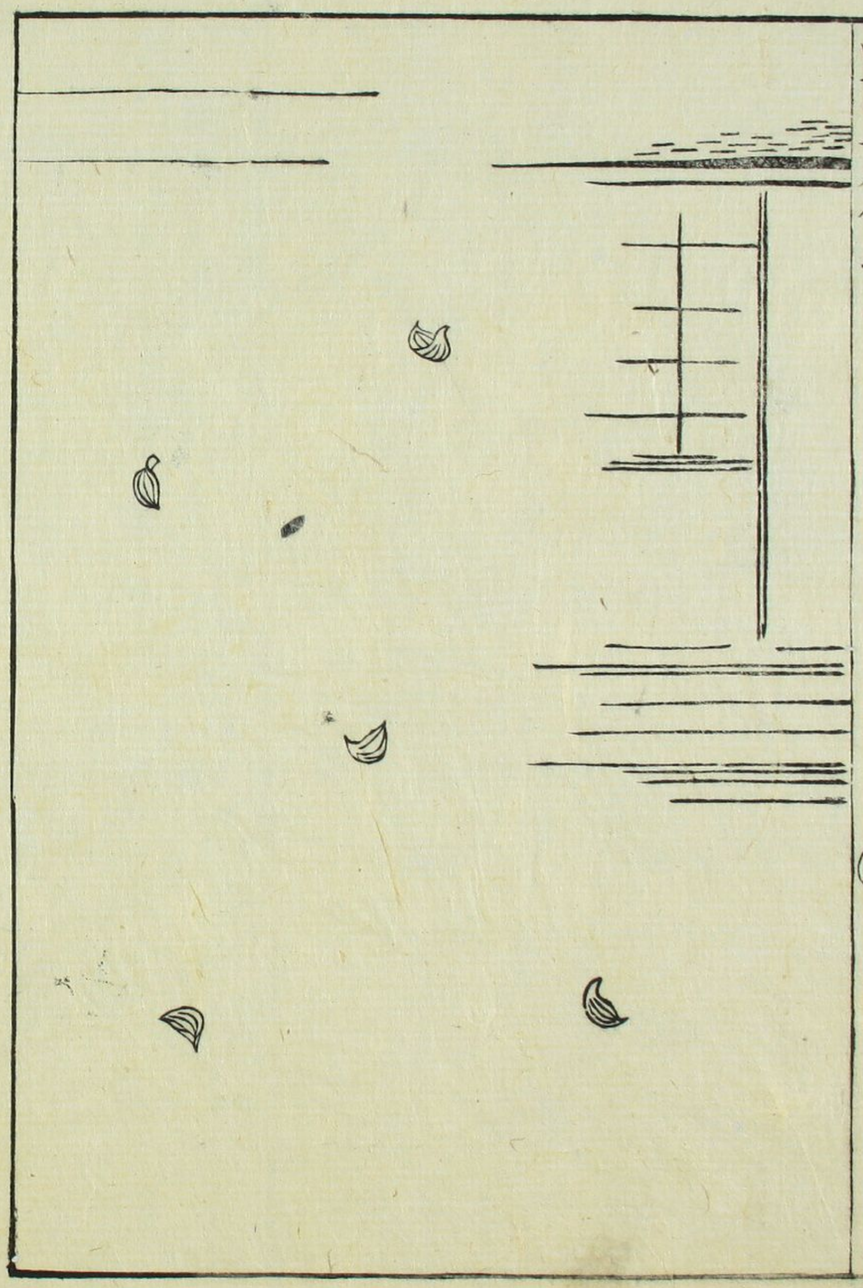


自ふしぎこせとあらい行る所あるなるひ
まて二四法まてに流布もといてを
那師なる敬徳細しして所を法れい
善育氏道俗を南とてて敬の所を
法世乃亀鏡小せ抜うるる五代
相傳乃二脈をさる往生至要訣

ちなつきて上人ちつ
きたへり時に延慶二年卯月立日なり
嘉後四和立年四月十日のころ
て圓寂せんと要訣なさせ事
元弘元年霜月廿九日聖阿の弟
りさつけたへり親筆にて淨花院



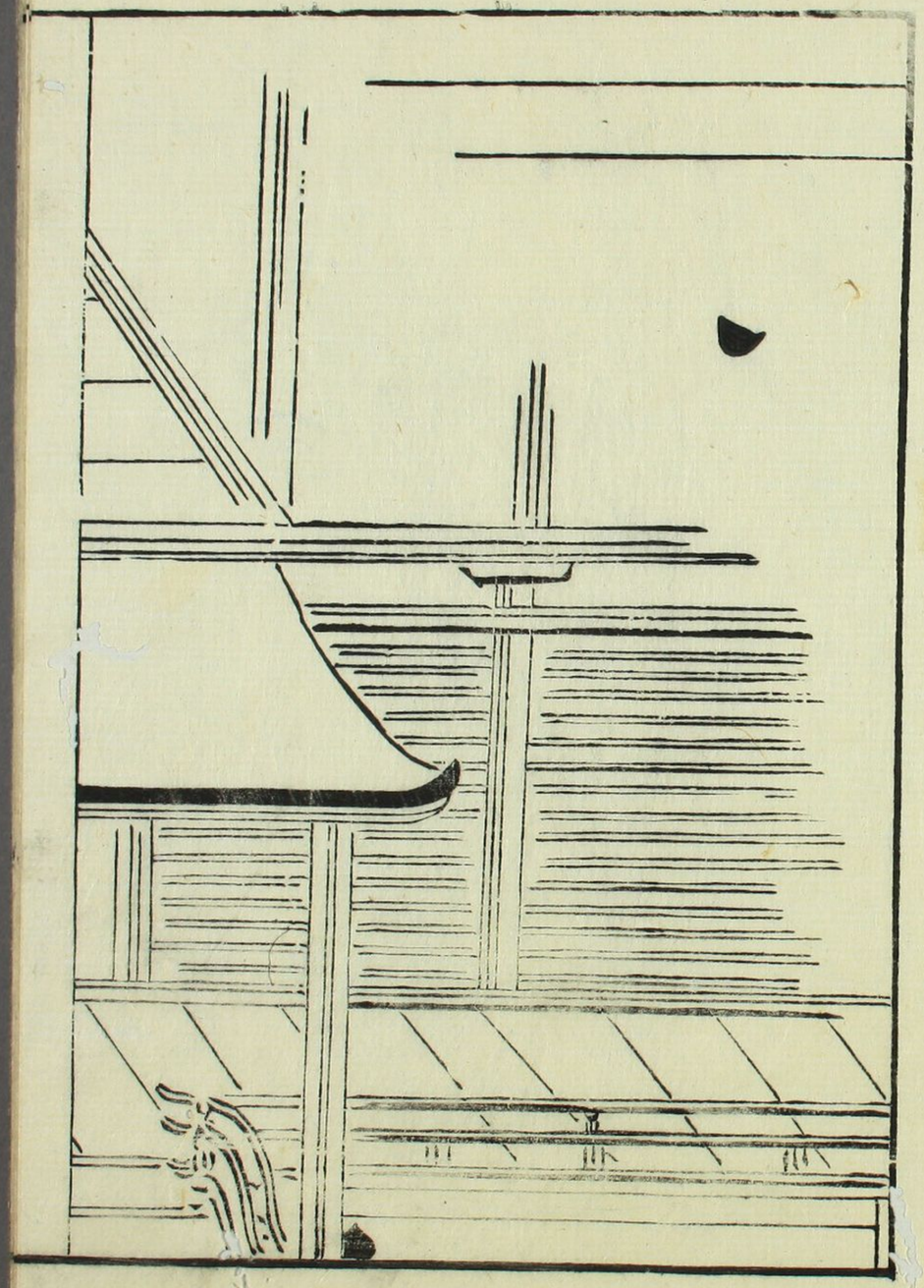
りあり上人の親世よ
なれし筆なりて道場なり



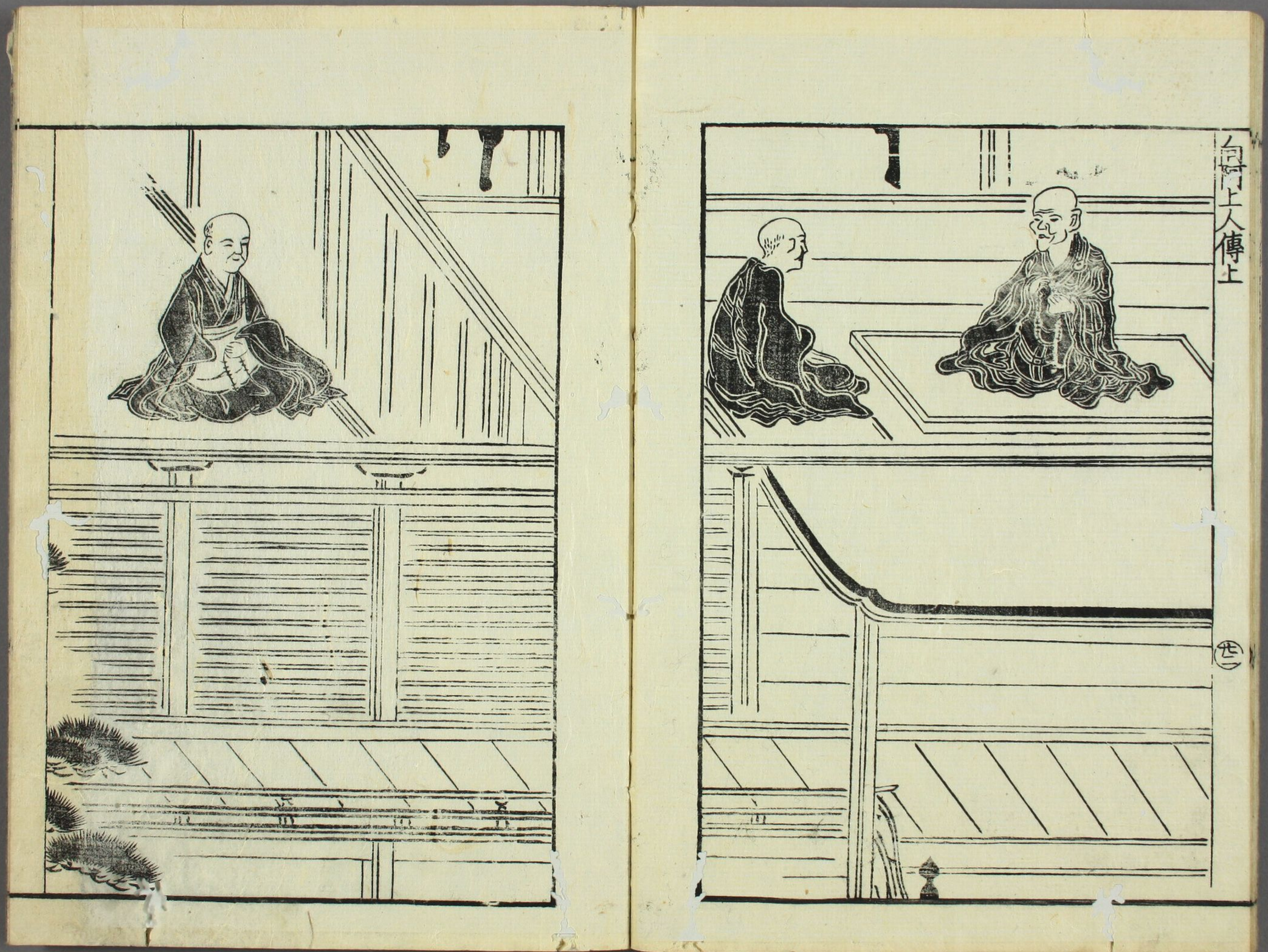
元亨法系浄土門乃餘流なるをあるそんあんしんの外
なるをあるいハ拾ゆ聞とおぼして
いのちへ白川ゆ法然の日
なくたのしへ入る同法然の
ゆ沙法ゆ仁其僧ハゆ去年

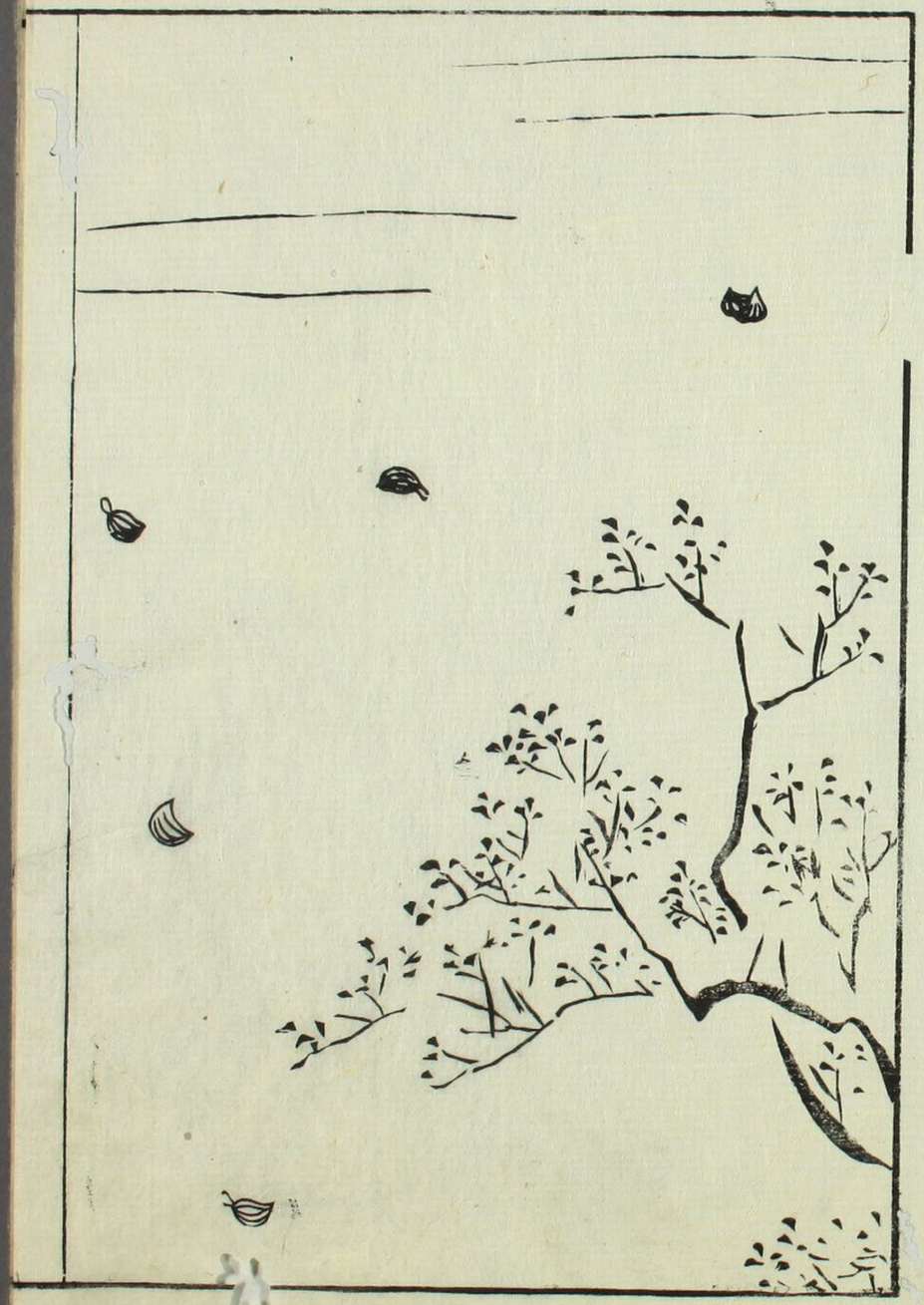
秋往生せりけるたまゐさる
事なれども今さらなるあるまじて
源孫のあらけしかるべし法よ
ほうして日しやうく入たんと法を
菩道をたるのしるをけいいたいかい
孫隨感應乃日なるまいはうてをれより

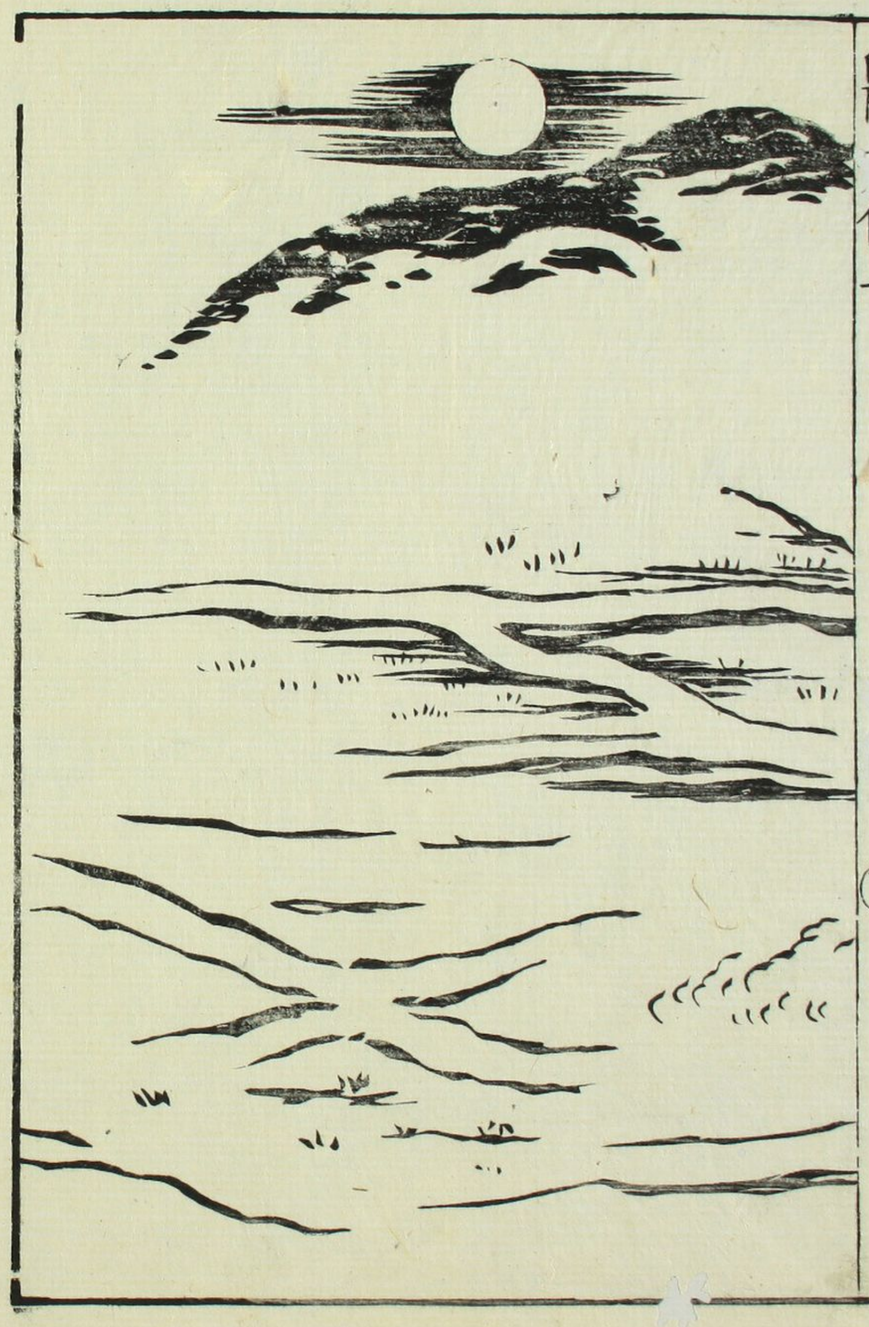
真如堂より南へ通夜し孫
ゐ月ちえ風さよくて小夜をゆう
く更行まに心をこさまこのまち
なる志川うふ念佛し孫よいけの
ゐよりの面ぬてに事絲俗二人より
て物語をし一人いまこさりふ土ふいぬき



ちる樣いとおひらりおちゆくを
世のもてはやすに日入るを恥ぢぬ
ものもなくこそあるべ
らんと思ひてすてる人なるべしい
にしへ初發心ほ者なるべしいく
よりて降り者にのあんとにはゆ







なるの事を居よりて仁の事をの語
らるゝと雖も答へ給ふ所とろ
念佛乃法門をして本末乃審
なること知るべくはるこゝぬ徹小二尊乃
化現なりて世を導えて悲哀を
くなるこのくてなの義を取

あるときと法師二人ばかりの
退出し給へるに行逢ひたまへ
ばかりにて上人を見奉りたまへ
り山あひの霧晴れてはる
へ法なり尊かりし

向阿上人傳卷上